

身につけた英語を使って

生き生きと伝え合おうとする生徒の育成

～2年英語科“オーストラリアの学校からのミッション！！”

蒲郡の町を紹介せよ”の実践を通して～

- 1 主題設定の理由
- 2 研究の方法
- 3 単元構想図
- 4 研究の実際
- 5 成果と課題

第2分科会
外国語教育
B 中学校・高校

白澤 義頭 (蒲郡・三谷中)

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動の取組状況

将来、国際社会においてたくましく活躍できる子どもたちの育成をめざして、外国語教育では「積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度」や「聞くこと・話すこと（やりとり）・読むこと・書くことの4技能5領域を総合的に活用できるコミュニケーション能力の基礎基本」の育成を最重要課題としてとりくんできた。この主旨をふまえ、本年度の教育研究愛知県集会でも、さまざまな工夫をした実践をもとに、創意あふれる19本のレポートが提出された。

I C T機器を活用して海外の児童生徒とのコミュニケーションの場の設定をするなど必然性のある場面を設定した言語活動の工夫が報告された。また、相手意識や即興性を重視した授業実践や、中間交流や振り返りを取り入れ児童生徒の主体性を育成する実践も多く報告された。相互評価や自己評価によりメタ認知力を高める授業実践も見られるなど、県内の小中学校において、新学習指導要領を意識した授業にとりくんでいる様子が伝わった。

2 今次県集会でみられた主要な課題

本次の県集会で提出されたレポートは「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」と3つの実践に大きく分類された。

「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方」では、AETや海外の児童とのかかわりの場を設定することにより相手意識や学習意欲を高める実践や、中間交流やSmall Talkの継続的なとりくみにより言語活動における主体性を引き出す中学校の実践が報告された。「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」では、リテリングにより発話における即興力を育成する中学校でのとりくみが報告された。また児童生徒が自己表現をしたくなるような課題を設定した上で、困り感の共有や相互評価、推測の時間を設けるなど、児童生徒が自ら問題を解決しよりよい話し手になるための工夫が見られる実践も多く見られた。

「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」では、生徒に身近な課題の設定した上で、グループ活動により相互の学び合いを深めていく実践や、中間交流や動画撮影による振り返りで児童生徒が自身のパフォーマンスを向上させていく実践報告があった。

3 今後の課題

新学習指導要領完全実施、そしてコロナ禍後の学校教育の変容を受けて、学習評価、小中連携の必要性、即興性を身につけさせるための工夫、I C T機器の発展的な活用など、外国語活動、英語教育や学校教育にかかわる課題はさまざまである。どのような子どもを育てていくかを常に意識し、よりよい指導を重ねることが重要である。今回報告された研究の成果や課題をふまえ、今後も子どもを中心にすえた有意義な実践に継続的にとりくんでもらいたい。

(鈴木由季子・矢後 智子)

報告書のできるまで

わたくしたちはそれぞれの学校で、子どもたちの健やかな成長を願い日々の教育活動にとりくみながら、自主的・主体的に実践研究を行っている。この報告書は、「学びの質を追究し、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にしたい、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」という愛知県の教育研究活動の重点項目をふまえ、継続して行ってきた実践の成果をまとめたものである。単組ごとの研究集会の分科会における実践報告と研究協議を経て、県の研究集会の分科会には19本のレポートが提出された。「わかる授業・楽しい学校」をめざし、子どもたち一人ひとりの主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫がどのレポートからもみられた。新型コロナウイルス感染症対策をしながらであったが、参加者の間では意見交換や質疑応答が積極的に行われ、助言者の先生方からは的確なご指導やご助言をいただき、充実した研究集会になった。

助 言 者	矢後 智子 (名古屋外国語大学)	鈴木由季子 (尾張旭・東栄小)
教育課程研究委員	高野 賢一郎 (名古屋・小幡小)	鈴木 啓仁 (豊川・御津中)
	加藤 直樹 (稲沢・明治中)	堀本 尚宏 (名古屋・上社中)
	稲垣 徹哉 (小牧・桃陵中)	楠崎 寛人 (豊田・浄水中)
	浦田 将夫 (海部・蟹江北中)	佐藤 公哉 (稲沢・大里東小)
	青木 龍一 (一宮・萩原中)	

1 主題設定の理由

本学級の生徒は、自分たちの住んでいる町が好きであり、3年ぶりに開催される三谷祭を非常に楽しみにしている。小学生の時に外国語を学習していたため、4月から新しく来たALTに対して、休み時間などに積極的に話しかける姿があり、話すこと【やり取り】について何とか自分の言いたいことを伝えようとする意欲が高い。本年度転入したポルトガル語を話す生徒に対して自分たちから話しかけ、言語や文化が異なる相手でも交流しようとした。しかし、自分の伝えたいことを一方的に伝えることが多く、相手意識をもって会話することが苦手であることやALTからの質問にも正確に答えられず、単語をつなぎ合わせた会話になってしまうことがある。外国の人と話したいという思いをもつ生徒が、英語を使って相手を意識したやり取りができるようにしていきたい。

今まで学習した表現を使って主体的に英語を使っていく態度を養うために、「英語を使って何とか相手に伝えたい」と思えるような場面の設定や教材を活用していく。また、単元の途中に人とかかわる場を設定し、その場を有効に活用していくことで、生徒の意欲をより持続させ、相手意識をもって自分の思いをいきいきと表現する姿を期待する。

以上の願いから、研究主題を「身につけた英語を使っていきいきと伝え合おうとする生徒の育成 ～オーストラリアの学校からのミッション！！蒲郡の町を紹介せよ～」とし、研究実践をすることにした。

2 研究の方法

(1) めざす生徒像

- | |
|---|
| I 既習表現をいかして、英語でいきいきと自分の思いを主体的に伝えようとする生徒 |
| II 人とかかわりながら、自分の表現力や相手意識を高めていく生徒 |

(2) 研究の仮説

- | |
|---|
| 仮説Ⅰ－ <u>身近な話題をテーマにし</u> たり、 <u>切実感のある課題を設定</u> したりすることで、主体的に学習にとりくむだろう。 |
| 仮説Ⅱ－ <u>仲間やALTとかかわる場の設定</u> をすることで、表現力や相手意識を高めることができるだろう。 |

(3) 仮説に迫る手だて

手だてⅠ－A 身近な話題をテーマに設定

生徒たちの『町』や『学校』を教材として取りあげる。住んでいる町に対して愛着をもっているため、主体的に学習にとりくむことができると考える。

手だてⅠ－I 切実感のある課題の設定

外国の学校から、「蒲郡の町について教えてほしい」とビデオレターが届き、町や学校を紹介する課題を設定する。英語を使う切実感をもって課題にとりくめると考える。

手だてⅡ－A 仲間とかかわる場

ペアで「すらすら英会話」を行い、グループで文章表現をアドバイスし合ったり、発表を動画で撮影して見る時間を設定したりすることで、自身の英語力を高め、相手意識をもって発表にとりくめると考える。

手だてⅡ－I ALTとかかわる場

ALTとかかわる場を設定することで、外国人からの視点で助言をもらい、自分たちの視野を広げることができると考える。

3 単元構想図

単元構想（全 12 時間） ☆・・・課題のきっかけとなる生徒の思い

オーストラリアの学校からビデオレターが届いたよ①

- 話すのが早かったけど、言っていることが少しはわかったな。
- Pardon me? って言うと、もう一度言ってくれたよ。
- 蒲郡について教えてほしいって言っていたね。

蒲郡の魅力についての紹介文を考え、オーストラリアの人たちに発表したり、会話をしたりして伝えよう。

☆蒲郡を紹介するために、どんな文を作ればいいのか。

目的を伝えたり、説明したりする方法を知ろう②③④⑤

- 「～がある」は “There is～” や “There are～” で表現することができるよね。
 - 1年生で習った I want to ～は「～がしたい」っていう意味だったから、“I want to go to the cafe.” って言うことができるね。
 - この前、call+もの+名前で「～を・・・と呼ぶ」ってことを習ったからこれも使えるよね。
 - to 不定詞を使って「～するために」「～すべき」っていう意味のある文も作ることができるよね。
- ☆もっと詳しく蒲郡について調べたいな。

蒲郡のおすすめを紹介するために必要な情報を集めよう⑥

- 竹島水族館はやっぱ紹介したいね。
- 今年、三谷祭はできるから、それも伝えたいよ。

1人で蒲郡についての紹介文を考えよう⑦⑧

Hello. We introduce Miya festival to you. This festival started in 1696. I want to go this year.

- 一人で考えると、うまく文を作ることができないな。
- この文で合っているのかを誰かに見てもらいたいな。

グループに分かれて紹介文を考えよう⑨

We hold this festival in October. And, we dance in the festival. We practice every night to dance well. Please look at us.(ダンスを見せる) People call this dance “Koodori”. How about you? Dancing Koodori is a lot of fun. We couldn't hold the festival last year because of Corona. But we can this year. We can't wait. Thank you.

- 自分の本当に言いたいことを表現することができたぞ。

考えた文を ALT に伝え、練習しよう⑩⑪

- ピーター先生に “It was very interesting.” “I want to see it.” って言ってもらえて自信がついたよ。

オーストラリアの学校の生徒に蒲郡を紹介しよう⑫

- オーストラリアの人たちが “I had a great time.” って言ってくれて嬉しかったな。
- 発表が終わったときに、拍手があって嬉しかったな。
- 実際に踊りを見せた時すごく真剣に見てくれていたよ。

<単元をくぐり抜けた生徒の思い>

初めて同じ年の外国人と話をしたけど、自分の伝えたいことが伝わったときにはすごく嬉しかった。相手の言っている言葉を聞き取ることができて、少し自信がついた。これからは英語を使ってもっとたくさんのかんことを聞いたり、伝えたりしていきたい。

〈教師支援〉

・「同じ年の外国人に蒲郡について紹介したい」という単元を貫く課題をもてるように、オーストラリアの学校の生徒からのメッセージを聞く場を設ける。

・会話する力をのばすために、新しく習った表現や疑問文を使ってやり取りをする「すらすら英会話」の時間を設ける。

・オーストラリアの生徒により伝わる発表にできるように、個人目標や毎時間振り返りをする時間を設ける。

・本当に伝えたいことを考えられるように、蒲郡について調べる時間を設ける。

・自分たちの発表の様子を客観的に見るために、ビデオ撮影をする。

・会話をより盛り上げるために、タブレットに入れた写真やイラストを使って発表するようにする。

・正しい英文が作れるように、ALT や教師がアドバイスをする時間を設ける。

・発表や会話の機会を増やせるように、ALT に伝える時間を多く作る。

・さらによい会話にできるように、アドバイスを聞く機会を設ける。

・次への意識をもてるように、この単元でできるようになったことを振り返り、次の目標を立てる。

4 研究の実際

(1) 抽出Aについて

本研究では、抽出Aの変容を追うことで手だての有効性を検証していく。

Aは、明るく活発な生徒であるが、自分の思いや考えを一方向的に話してしまい、相手を意識して会話することが苦手である。授業では、本文の暗唱や与えられた課題に対して意欲的にとりくんでいる。前単元では、ゴールデンウィークの予定をALTにタブレットの画像を見せながら伝え、自分の英語が伝わる喜びと同時に、聞かれた質問に対して英語で答えることの難しさも味わった。本単元の活動を通して、自分の興味・関心をもったことを聞く人を意識して、自ら進んで英語で発信し、いきいきと表現しようとする姿を期待する。

(2) 研究の実践と考察

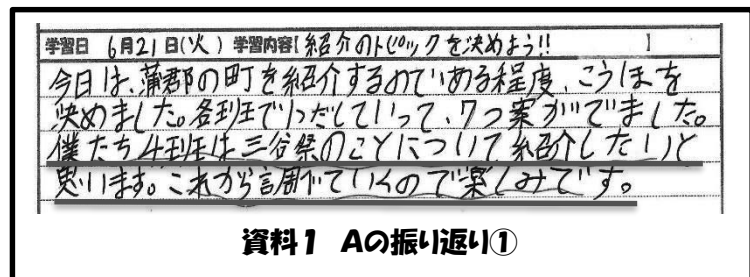
①オーストラリアの生徒に蒲郡を紹介したいと思うA（手だてI-A、Iの検証）

単元の導入で、以前から交流のあるオーストラリアの姉妹校から届いたビデオレターを見る場を設定した。そこには同学年の生徒が日本語で自己紹介していた。生徒たちは「オーストラリアの教室ってこんな感じなんだ」「雪が降っているね。むこうは冬なんだ」と外国の教室風景や季節の違いに興味を示していた。ビデオの最後で“Please tell me about your town.”という言葉聞き、「三谷祭とか紹介したら、絶対に喜ぶよ」「日本語で紹介していたから、英語で伝えたい」など自分たちの住んでいる町について英語で教えたいという思いをもち始めた。

Aはオーストラリアの生徒からのビデオレターを見て、振り返りに「僕たちも手紙や何らかの形で返したい。本気でやって喜んでもらえると嬉しいです」と書いた。目を輝かせてビデオを見る様子や振り返りから自分たちの町や学校を知ってもらうために英語で伝えていきたいという課題をもつことができた。

ビデオレターを見た後、蒲郡の何を紹介するのか、どうやってそれを伝えていくのかを考える時間を設けた。すると、生徒たちから、「三谷祭を伝えたい」などという意見が出たため、紹介文のトピックを“Miya Festival”“Takeshima”“Takeshima Aquarium”“LAGUNA”“Gamagori Oranges”“Kobo Statue”“Miya Junior High School”の7つに絞り込んだ。さらに「せっかくなら直接話したい」という意見があがったため、コミュニケーションアプリを使ったテレビ電話で紹介することにした。

Aは三谷祭を紹介することにした。資料1から「僕たち4班は三谷祭のことについて紹介したいと思います。これから調べていくので



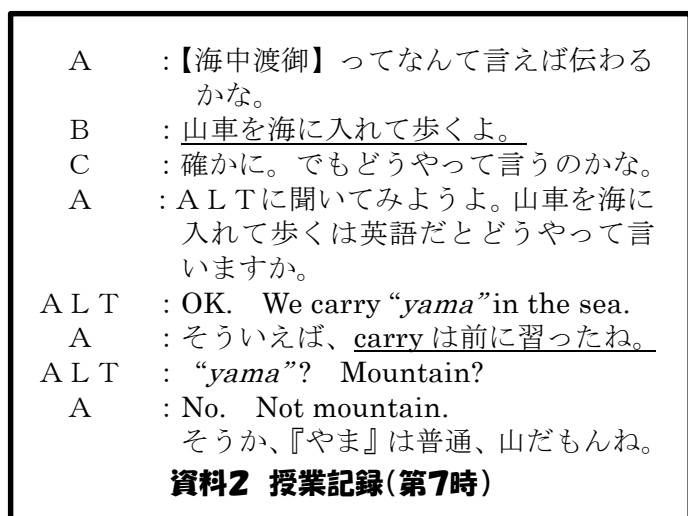
楽しみです」と振り返った。Aは自分の好きな祭りを紹介することになり、これからの学習にむけて期待が高まっている様子が見えられた。

単元の導入に、オーストラリアからのビデオレターを見て、自分たちの町を紹介するという身近なテーマを課題に設定することで、生徒の興味・関心を引き、「英語で紹介したい」と主体的に学習にむかうことができたといえる。

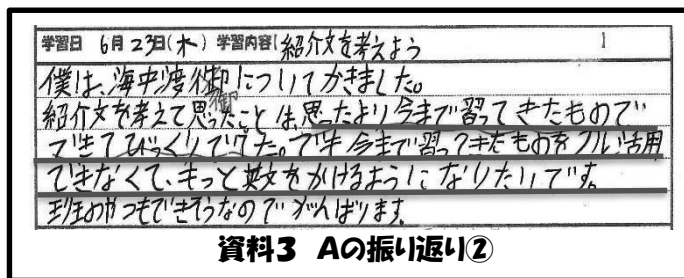
②仲間のアドバイスを聞き、自分の思いを表現したA（手だてII-Aの検証）

第7時では、学習意欲が高まっている生徒たちは一人で紹介文を書くことに挑戦した。しかし、生徒たちは伝えたい情報はもっていても、どのように書き始めていいのかわからず、戸惑っていた。そこで、今まで習った表現を使った、蒲郡を紹介する例文を提示した。すると、「質問から始めると興味をもってもらいやすいのか」「最初はどのような祭なのかを伝えて、あとで詳しく書けばいいんだね」と言い、書き始めた。

Aは海中渡御^{かいちゆうとぎょう}について、紹介しようとしていたが、うまく説明ができず困っていた。そこで、同じ話題を紹介する仲間やALTにどうやって言えばいいのかわかを相談した。資料2のように、Bの「山車を海に入れて歩く」という意見を聞き、海中渡御について表現方法の視野を広げることができた。「carryは前に習ったね」という言葉から、習った単語を使っ



て文をつくることができる」と気づいた。また、資料3よりAは「紹介文を考えて思ったことは、思ったよりも今まで習ってきたものでできてびっくりした。・・・もっと英文をかけるようになりたい」と振り返り、自分の言いたいことを、既習表現を使って文をつくることができることがわかり始めてきた。



資料3 Aの振り返り②

さらに、英文をつくることに対して意欲を高めることができた。

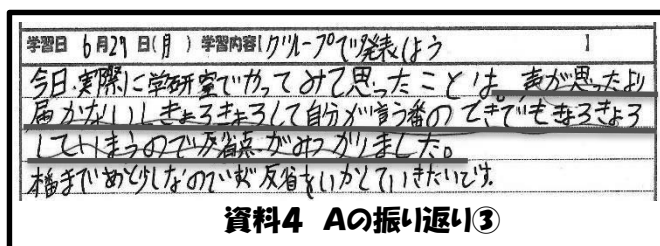
仲間とかかわる場を設定したことで、一人では思いつかなかった視点で文を考えることができ、自身の表現力を高めることができたといえる。

③自分の発表動画を見て、よりよい発表にしようとするA（手だてⅡ-アの検証）

生徒から「友だちに聞くと、伝わりやすい文がどんどん書いて楽しいからグループで考えてみたい」という声があがったため、グループで紹介文をつくり、発表することにした。個人で紹介文を考えただけ、グループになって発表準備をすることになった。生徒たちは、それぞれ考えてきた紹介文をより伝わるものになるように新しく文を考えたり、書き直したりした。生徒から、「山車を見せたいから、プレゼンテーションツールを使いたい」と申し出があつたため、プレゼンテーションツールを使って発表することにした。

また、「うまく発表できているのか不安だ」という声があがったため、自分たちの発表を動画に撮り、その映像を見る場面を設定した。見ている時には、「原稿ばかり見て、全然前をむけていない」「最後は“Thank you for listening.”と言うと相手も終わりがわかるよ」など、反省したり、班どうしで助言したりしていた。

Aは資料4から「声思ったより届かないし・・・きよろきよろしてしまうので反省点が見つかりました」と示しており、自分の発表を見直すことができた。



資料4 Aの振り返り③

タブレット端末を活用して、自分たちの発表を撮影し、振り返る場を設定することで、目線や聞き取りやすい声を出すことの大切さに気付き、より聞いている相手への意識を高めることができたといえる。

④オーストラリアの生徒への発表前にALTに紹介し、

話すことへの自信をもち始めたA（手だてⅡ-ア、イの検証）

4月から、生徒たちは授業開始後に5分間で補助教材の『すらすら英会話』（浜島書店）を活用して行っている。ペアで行い、互いに英語表現を学び合ったり、即興的英会話に慣れさせたりすることが目的である。ワークシートを見ながら、すらすら言えるようになったら、「じゃんけんをして、負けた人はワークシートを見ない」→「じゃんけんで勝った人はランダムで質問する」→「自分のことについて答える」と変化を加えていく。授業回数を重ねていくと、指示がなくても自分たちで話す内容を変えたり、自分のことについて話したり、“Well、...”や“Me、too.”など一言加えるようになっていった。

発表の意識するポイントがわかりつつある生徒は、「発表は少しずつできるようになったけど、外国の人に伝わるかな」「終わったときに質問されたらどうしよう」と不安な声を漏らした。蒲郡市内のALT3人をゲストティーチャーにむかえ、自分たちの発表を聞いてもらい、その後質問をしてもらったり、アドバイスをもらったりする場を設定した。予め聞かれそうな質問を考え、答えを用意させた。

「練習通りに上手く伝えることができた」という声が聞こえた。Aも紹介文を堂々と発表することができた（資料5）。資



資料5 ALTに紹介するA

料6より、はじめはALTの質問に対して、答えることができたり、「予想していたことが聞かれた」と事前に用意していた回答を活用したりすることができた。さらに、ALTの“This festival isn't in America and Australia. It's interesting.”や“What is yama?”という発言や質問を聞き、「山車はオーストラリアにないから、伝わりづらいか」と発言した。Aたちは山車の写真を使って発表したが、それでも伝わらなかったことに困惑した。資料7では、Aは「質問を予想できたときは自信満々にいえて楽しかったです。・・・もっと面白い話にしてみんなに喜んでもらいたいです」と振り返った。ALTと会話し、自分たちにとって当たり前と思っていた祭りが三谷特有のものであると気付いた。また、外国の人が自分たちの町に興味をもってくれたことに喜びを感じた。

ALTとかかわる場を設定したことで、外国との文化の違いに気づき、相手に自分たちの文化をさらにわかりやすく伝えていこうとするなど相手意識を高めることができたといえる。

⑤気持ちを新たにして動き出したA（手だてIーIの検証）

ALTとのやり取りを経て、生徒たちはさらに発表への気持ちを高めた。しかし、姉妹校の授業カリキュラムが突然変更になり、日程調整が難しくなった。そのため、紹介方法をコミュニケーションアプリでのやり取りではなく、ビデオレターを送ることにした。その事実を知った生徒は残念な様子であったが、気持ちを切り替え、ビデオレターにむけてがんばり始めた。「本番の撮影前にもう一度自分たちの姿をビデオに撮って、確認したい」「今度はビデオを送るって目でALTに聞いてもらいたい」と言った。そこで、再度自分たちの発表を撮った。「上手くいったから、もっと楽しそうに発表しよう」と振り返り、さらによい発表にしようとお互いに確認した。その後、ALTと発表練習をし、Aは“Your speech is great.”と言われ、仲間と喜びを分かち合った。

ビデオレターをつくる際には、見ている人に伝わるよう、カメラ目線を意識し、ゆっくりはっきりと発表することができた（資料8）。さらに、Aは“It has a history for about 300 years.”という一文を付け加え、三谷祭の歴史を紹介した。

- ALT : Your speech is excellent.
Who carries this yama?
A : Well, everyone.
ALT : Oh, I see. Do you like this festival?
A : Yes. Yes, I do.
ALT : OK. One big question!
Why do they go in the sea?
A : あ、予想してたことが聞かれた。
I'm sorry. I don't know.
It's celemony.
ALT : Let's check.
This festival isn't in America and Australia. It's interesting.
Last question! What is yama?
A : (何の目的なのか) わからない。
I'm sorry. I don't know.
【終了時間になる】
ALT : Thank you for talking.
B : オーストラリアにはないから、質問がめちゃくちゃくる。
A : 山車はオーストラリアにないから、伝わりづらいか。

資料6 授業記録(第10時)

学習日 6月28日(火) 学習内容! ALTに三谷を紹介しよう 1
僕は今日ALTの人に発表してあげたことは、質問めっちゃくるなと思いましたが、質問を予想できたときは自信満々にいえて楽しかったです。・・・もっと面白い話にしてみんなに喜んでもらいたいです。
ALTと会話し、自分たちにとって当たり前と思っていた祭りが三谷特有のものであると気付いた。また、外国の人が自分たちの町に興味をもってくれたことに喜びを感じた。

資料7 Aの振り返り④



資料8 ビデオレター撮影時の生徒

資料9のビデオレター作成後の教員との対話記録では「早く来たいとか言ってくれたらすごく嬉しいし、もっと紹介したいな」と言っており、オーストラリアの学校にビデオレターを送ったことで、さらに交流していきたいという意欲をもつことができた。Aはこれまで学んできたことに達成感を得て、今後の学習への意欲を高めることができた。今後は姉妹校との日程調整を再度行い、コミュニケーションアプリでのやり取りができる場を設けていきたい。

本単元を通して、Aはペアやグループでの生徒、ゲストティーチャーなど、たくさんの人とかかわりをもつことができた。彼らとのかかわりが増えていく中で、自分の思いを日本語や英語を使って表現する機会が増やすことができた。今後も英語を学ぶ必要感や楽しさを味わうことのできる題材を考え、自分の思いを表現できる生徒を育てていきたい。

5 成果と課題

①成果

英語を使いたいと思えるような場面や課題を設定することで外国の生徒に英語で伝えたいと主体的に学習にとりくむことができた。今後も姉妹校との関係を授業にいかしたい。

A L Tとかかわる場を設定することで、外国との文化の違いを知り、自分たちの視野を広げたり、文化を見直したりするきっかけになった。

『すらすら英会話』にとりくんだことで資料6のように“Well.....”と表現が自然と出てきたり、質問に対して迷わず答えたりするなど相手を意識した会話をすることができた。

②課題

話すこと【やり取り】する意欲をより高めるために、導入でもコミュニケーションアプリを用いたかかわり合いの場を設定する必要があると感じた。

外国の人に自分たちの文化について詳しく説明できるよう、祭りの意義などを調べるなど、深く探究する時間を設ける必要があると感じた。

T : ビデオレターを作ってみて、どうだった。
A : 緊張したけど、すごく楽しかった。
T : どうして楽しかったの。
A : 自信をもって言えたり、A L Tに言われたことを全部やれたから。
T : 何言われたの。
A : ゆっくり話すこととか、面白くするために祭りの歴史も入れたから。
T : ビデオ見て、なんて言ってくれるかな。
A : 早く来たいとか言ってくれたらすごく嬉しい、もっと紹介したいな。

資料9 対話記録(第12時)